BeautiFoolのエッセイ 3

アルル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｂｅａｕｔｉ Ｆｏｏｌのエッセイ３

【Ｎコード】
Ｎ５７５０Ｌ

【作者名】
アルル

【あらすじ】
今回は“学”が何だ！　という内容です。学で語る人に是非読んで貰いたいものです。

（前書き）

学を以って語る人達へ。これを読んだ感想を是非お寄せ下さい。
ただし、本気の方に限らせて頂きたく思います。

これはエッセイの第三弾である。前回までの批判的な考えではなく、今回は研究を主とした物を書こうと思う。因みに、前もって言っておくが、“あろか”という書きまわしは、“あろうか”の略であり、一々格好を付けている訳ではない事を宣言しておく。勘違いをされては困る故。古い言い回しも癖であるので容赦されたし。それでは……。

之までの僕はどうやら逆上せていたらしい。感想やメッセージという形でそれを教えられた。然しながら、命は遣うものというスタンスには変わりは無い。であるからして、この物に書き込みをするならば、それを伝えたならば死んでも良いという覚悟をして頂きたい。言うまでも無いが、実際に死を賜れという訳ではない。同じスタンスで挑んで欲しく思うのである。

今回のテーマは文学に於ける“学”である。以前までの様な体(てい)で論じるのではなく、考察に努めたい。然し、訓戒の様なものも混ぜておきたく思う。

さて、学と言うとあまりに漠然としているので多少の肉付けをしたい。この場に於いての学とは、一般に言われる学力、加えて本等を独自に読んで得た知識等を包括したものである。

文学を遣る上では当然の如く必要とされるものであるが、それは果たして文学という性質上の本来なのであろか。確かに、描写や表現力の向上を求むるのであれば、語彙が豊富でなければならない。そうでなければ、定めし中々に伝わり辛い文章となるであろう。然しである。子供の書いた物が文学性を持たないかと言えば、一概にそうとは言い切れない。なれば、学とは全体何なのであろか。文章をより高尚にする為のものであろか。或いは、読解力の、即ち、読者の手助けをする為のものであろか。疑問は尽きない。文学部とい

う学部を出た者であっても、文学を真に理解しているとは言い難い。いや、文章、小説とは一様ではない事を鑑みると、理解という言葉は的外れであるとも言えるだろう。此処までの件で解る通り、言ってみれば学とは“ふりかけ”の様な物であると考えられる。何故なら、学部という学を学ぶ処に於いても、真に理解する事は不可能だからである。諸説様々な、文学という難解な形式を学ぶの点に於いて、必要とされる事は学だけでは無いと言えよう。古書や洋書を紐解いてみたり、新説に頼るのも良いが、それだけでは小説と呼べる物は書けないのではないかと僕は考える。話が逸れる様に思うかもしれないが、一般的な学生が自身を“私”などと呼ぶ事も大いなる誤りであると考えられる。たかだか二十程の者が私などと言うのは、傍から見ていて随分と大仰に見える。詰まり、勘違いなのである。社会に出てみれば解る事であるが、自身がどれ程子供であるかという事を失念しているのである。であるからして、これは誤りなのである。ヒヨッコが私などという言葉を使う事で、自身を過大評価しているのである。実を伴わない学など机上の空論に過ぎないと考えるのは僕だけであろか。例え、人の何十倍も本を読み、知識を得た処で、それは畢竟データなのである。情報の欠片である。情報とは、知識を統合し、かつ、価値や意味の有るものに変換したものである。それを履き違え、読んで得た知識をあたかも情報であるかの様にのたまう輩が大層目に付く。特にこのサイトに於いては非常に多く居るように思う。ワイヤードで何を言おうが勝手だ、という意見も確かではあるが、そういった者に惑わされては不味(いけな)い。自身の想いを尊重しなければ思想は生まれない。かといって、己惚れても不味い。然し、哀しいかな。ケイタイ小説を書く年齢層は比較的低いからして、それに至る者は稀有である。無論、僕の意見が正式であるとは言わないが、然し、一考の余地くらいは有ると思う。此処までの結論としては、難しい言葉や理論を持ち出す前に探求をすべきであるという事である。探求とは素晴らしいものである。未知との遭遇に因り、自身の一歩を大きく前進させて呉れるからである。物を書く

上では、小理屈や論文の抜粋など何の役にも立たない事を知るべきである。また、思想無き物は文学とは到底呼べない。僕としては感想文くらいにしか思えない。従って、読む気も無い。このサイトには随分沢山の文学小説が有るが、そのタグには不思議な事に、“ファンタジー”とか“ＳＦ”などとしてある物が多い。これらに関しては、正直理解不能である。学以前に、全体何がしたいのか、という疑問で頭が一杯になってしまう。然し、これらは作者の自由なのであるからして、これ以上は問うまい。

次に、学を論じる者の不思議について考えてみたい。彼らは何を根拠に自身を正当化するのか。又、何故正当化しなければならないのか。一意見として留める事は出来ないのであろか。大いなる矛盾である。学を以ってして自身を肯定したいのであれば、他にも遣り方が有る。場所もあろう。此処で評価、評論を持ち出してみたい。彼らは作者の為にそれを行うのであろか。それとも自身の為にそれを行うのであろか。僕の之までの経験から言って、八割方が後者である。一体何が目的なのであろか。自己主張をしたければ書けば宜しい。その上で、感想の遣り取りなどを通し、互いの精進とすれば宜しい。然し、現実にはそうではない。評価人の殆どが、自身の学をひけらかしている様に見える。遠まわしに、自身の望む型に嵌めようとしている様に見える。此れは恐らく勘違いではない。書けない者がやっかんでいるとしか思えない。稀にプロが混じっている事もあるようだが、然し、プロとて立場が違うだけであり、それが真実であるとは言い難い。参考にはなるが、その通りに書いた処で、畢竟それは二番煎じなのである。故に、不特定多数の参加するサイトに於いての学の披露は危険なのである。彼氏彼女は自由に書けば良い。成長の糧は自身のバックボーンと之からの体験、経験なのである。それが情操にまで発展するかが勝負なのであり、学は二の次なのである。学から始まる小説は、個人的な意見ではあるが、あまりにも無責任であり、これも以前のテーマであるが、影響力の功罪を無視した物になる事が多い。プロの中にもそういった者が多数居

る。であれば、これは僕個人の意見として流すべき事ではないと考えて頂きたい。

さて、先述の通り、学を以って論じる者には大いなる矛盾が有るのは事実である。まず考えて頂きたいのは、学に文学性が有るのかという疑問である。此れは論じるまでも無く、否、と言える。学術にはそれぞれの存在理由が有り、それを追求する為に研究するのであるから、単純な学というものには文学性は無いと言える。文学そのものはどうかという問いは最大の悪手であるからして、此処で一々述べるのは止そうと思う。では、大いなる矛盾とは何かと言えば、それは“恋”である。一般論での恋ではなく、詰まり、男女間での恋というのではなく、文章そのものに対する恋である。文章を読む事に恋をし、また、文章を書く事に恋をする。これこそが文学、いや、ひいては文壇に於ける最大の矛盾であると言えよう。今回は文学を題材としているので、ラノベなどは控えさせて貰うが、然し、賢明な書き手はどうぞ一考されたし。

何故、恋というものが矛盾に繋がるのかと言えば、実は言うまでも無い。プログラマーの書いた文章と、詰まり、ロジックのプロが書いた物と、幼いが、書く事に情熱を注ぐ者が書いた物とを比較したなら一目瞭然であると言えるだろう。ロジックのプロの書いた物は非常に洗練されており、内容も解り易く、定めし読み易いことだろう。一方の、幼い物書きの書いた物は比較出来ない程に未熟であり、かつ、さぞかしテンポの悪い物だろう。然しである。其処に見出されるメッセージ、或いは、思想、理念、想いは、幼い物書きのそれの方が勝っているに違いない。これはあくまでも例えであるからして、勝手に読み違え、文句を言うのは止めて頂きたい事を予め忠告しておく。

これで矛盾とは何ぞやという疑問は晴れたのではなかろうか。矛盾とは即ち、中身が想いに満ちているか、というものである。先述の通り、学を以って論じる輩は、履き違えた知識を以ってして物を見、そして、論じている。これは大変な誤りである。正直に言えば、

『よくもまぁそんな遠回りをするもんだ』というのが僕の意見である。よしんば、それで良しとした処で、書き手に対しての礼儀は何処へ行ってしまうのか。情熱には情熱を以って当たるのが至当であると考えるのは僕の一人善がりであろか。確かに客観的に見る事も大切ではあるが、焦がれる事の無い者が、焦がれる想いにただただロジカルに感想を述べても説得力が無いのではないか。と、言うよりも役に立たない。舌戦がしたいのならプロとすれば良く、習作に対し、学で論述するのは少々出すぎた真似ではないのか。良くあるパターンだが、先述の通り、自分は何十冊、何百冊も読んでいるとか、自分は色んな物に目を通し、色んな書き方を知っているとか、そういった根拠付けが目に付く。はっきりと言おう。『だから何なの？』と。悪いが、人は書けと言われれば、一冊の本を読めば一本書ける。無論書き方の基礎は必要ではあるが。然し、書けるのである。肝要なのは読んだ冊数ではなく、読んだ感動なのである。それが書く原動力となり、また、憧憬なのである。詰まり、それを以って恋と言うのである。僕は此れに対する異論が大いに楽しみである。ロジックを基に文学を語る輩がどの様な反論をするのか、また、出来るのか。とても愉快な気持ちである。

そろそろ本題に戻そうと思う。というのは嘘である。全くとして逸れてなどいない事は解って頂けているであろか。論点が同じであり、かつ、それを取り巻くモノ達を説明するには、喩えが必要なのは言うまでも無い。が、前回まではそれが解らない若輩が多かったので、今回は敢えてこういった一文を挟んでみた。論文も書いた事の無い子達にはまだ早かったかな、とも思うが、自身に自信を持っているのだから此処でも素晴らしい反論が期待出来る。どうにも楽しみで仕方が無い。因みに反論は読むだけ読むが、議論をする積りはもう無いので、承知されたし。但し、それは“アンチアルル”に限っての事であるので、そうでない方には是非とも大いなる批判をして頂きたい。これもまた、本筋との関連は有るので論点の摩り替えであるというのは間違いである事を、一度頭を冷やして認識して

頂きたい。全ては書く事の一環。恋の延長。すべからく御理解頂きたい。一部に、こういったサイトに於いてこの様な問題に言及する事は有意義であるという意見も頂戴している。であるからして、僕はそれを根拠に、また、自身の信念、魂に誓ってこういったエッセイを書かせて頂くのである。惰性で物を書く積りは無い。また、一考という言葉を以って、自身の考えが全てに於いての本来ではない事を宣言する。その上で読まれたし。此れは感情論に於いて書く物ではない。が、論文では意味が無い為、エッセイという名を借りて書くものとする。

さて、今度こそ逸れてしまったので本題に戻ろうと思う。

僕の究極の答えは恋である。そして、それ無くして、小説とは、特に文学とは呼べないという事を此処に明言する。畢竟それは、単なるエンターテイメントである。単なる読み物である。僕はそれを文学小説とは認めない。文学小説とは自身の命を篭めた究極のラヴレターであると宣言する。想いの連なりであるのだから、簡単には否定出来まい。さあ、挙(こぞ)って参加すると良い。此処に至ってはロジックなど通用しない。どの様な手法で僕を嘲るのか。どの様な手法で僕を排斥するのか。楽しみで口元が歪む。僕を楽しませて呉れた者にはキスをプレゼントしようか。おっと、正式には唇を湿らせておかねば。濃厚なのが御好みなら応じよう。文字という手法で。ヴァーチャルではあるが、言葉という人類の本来で。此れを読んだ彼氏彼女はどう思う？　何も言えないのであろか。それとも。エッセイである事が証明された。此処まで文章を振るえば論文とは思えまい。小説とも思えまい。此処からが実は本題だ。掛かって来い。短い命だ。何に遣うかは君らが決めたまえ。それとも腰を抜かすか？

こんな僕だ。一刀両断にすれば良かろう。遣れるなら、だが。然し、僕はそれを待っている。僕などよりも遥かに深い恋を文学に捧げた者を。

悪戯が過ぎた様だ。何しろ僕の名はアルル。人を楽しませてなんぼである。この名を剥奪したい者は現れるであろか。或いは、誰一

人このエッセイを読まないかもしれない。それもまた一局。人の限界など高が知れている。僕にはこの程度のものしか書けない。だからこそ、嫌われるのであろう。然し、僕の名はアルル。遣らなければ似非である。器用に踊って見せよう。玉乗りなら朝飯前である。賢い君達だ。もう解っているだろう？　この文章が何を意味するのか。遠まわしの挑発である。随分と簡略的なエッセイではあるが、然しだ。前回ケンカをふっかけて来た連中に黙らされる憶えなど無い。大きな声で叫んでやろう。君達は幼い。あまりにも社会経験が足りない。ゴミの様な扱いを受けて猶、立ち上がって来る根性を身に付けて出直して来るが良い。情操に至って初めて文学を語る事の出来る事を知れ。探求に努めて気付く事を口にしろ。

最期に僕のもう一つの名を教えよう。その名は菊月眞だ！　以上。

（後書き）

どうでしょうか？　まだ、学で語りたいと思われますでしょうか。まぁ、それは個人の自由として、僕はあまり好意的ではない事を御承知頂けたらと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5750l/

BeautiFoolのエッセイ３

2010年10月8日14時58分発行